人的資源の涵養と保育

會長　下村壽一

近頃人的資源の涵養といふ語が興亞の合言葉として各方面に流通してゐる。これは東亞新秩序建設の大業を完遂する爲には金も器材も固より必要であるが、それよりも人の力人の數が更に必要であるから、兎も角も「生めよ殖せよ」で、大に人口の増加を圖らなければならぬ時代の叫びであると速了してゐる向がないでもないやうである。併しそれは餘りにも短見であつて、材質のよからぬ内容も粗雜な穀潰し的の人間が幾ら殖えても、それは唯興亞の大業の足手纒となるばかりで、國家の蒙る迷惑は此の上もないことであるから、「生めよ殖せよ」の外に「立派に育てよ」の一語を附け加へて、本當に健全有爲なる國民育成に努めなければ、單に頭數を殖やす丈けでは、全然無意義否寧ろ有害と言ふの外はないのである。かくて教育は國策の基礎であるとは如何なる場合にも眞理であつて、興亞の原動力たる人的資源の涵養も、教育が根柢にならなければ決して花を咲かせ實を結ばせることは出來るものでない。教育の分野の中でも幼兒の保育は、人の一生を通じて最根本的な最決定的な影響を心身兩方面に及ぼすものであるから、「立派に育てよ」の責任の大半は保育の仕事の上にかゝつてゐると申しても決して過言ではあるまい。斯様に考へると保育從事者の任務は直接には時局に縁遠いやうに見えるけれども、實は聖戰の目的達成の爲最根本的な重要な國策を遂行すべく、水鳥の足のやうに表面に現はれぬ不斷の努力を捧げつゝあるのであつて、この努力が今後幾年かの後、八紘一宇の雄大な國策完成の事實となつて酬ひられることを吾等は確信を以て待望するものである。